

博士論文（要約）

ハンガリー系「亡命者」とパリ講和会議体制（1919-1925年）：
代替案の模索と講和条約遵守の狭間で

辻河典子

第一次世界大戦末期の1918年10月30-31日にハンガリーでは共和主義的な革命（「十月革命」）が勃発し、改革派の貴族で王国議会議員だったカーロイ・ミハイ *Károlyi Mihály* を首班とする政権が成立した。「十月革命」政権は普通選挙権の導入・共和国宣言・土地改革などのいわゆる近代化政策を行ったものの、ハンガリーの領土解体を決定づけたパリ講和会議の勧告を拒否して1919年3月21日に辞任し、社会民主党に政権を委ねた。社会民主党はクン・ベーラ *Kun Béla* 率いる共産党との合同を決め、プロレタリア独裁による評議会革命政権が発足した。評議会革命政権は急速な集団化を行うと共に、赤軍による領土回復を試みた。しかし、拙速な共産主義化政策への反発と1919年6月下旬にパリ講和会議の勧告を受けて撤兵したことによる求心力の低下、ルーマニア軍の侵攻により、1919年8月1日に評議会革命政権は倒れる。後を引き継いだ社会民主党右派による政権もクーデタで倒れ、ルーマニア軍の侵入や反革命勢力の台頭と彼らによる「白色テロル」により、国内の混乱が続いた。この混乱を収束するために1919年秋に講和会議主導の会議が開かれ、旧海軍提督ホルティ・ミクローシュ *Horthy Miklós* 率いる反革命勢力「国民軍」がブダペシュトに進駐した。翌1920年1-2月に行われた総選挙で成立した国民議会により3月にホルティは摂政に選出され、6月には講和条約であるトリアノン条約が調印されてハンガリーの歴史的領土の解体が国際的に確定することとなった。以後のハンガリーではこのトリアノン条約の修正を最大の外交課題と位置づけながら、権威主義的な体制が確立していく。本論文では、こうした時代背景の中で「十月革命」政権に参加した政治家たちが1919年から1920年代前半にかけて行った亡命政治活動について、同政権の首班であったカーロイ・ミハイ（1875-1955年）と、彼に積極的に協力したヤーシ・オスカル *Jászi Oszkár*（1875-1957年）の活動を軸に取り上げる。

「十月革命」政権に参加した主な政治勢力としては、カーロイ率いる「独立と四八年党」（通称カーロイ党）、社会民主党、ヤーシ・オスカル率いる全国市民急進党を中心とした改革派知識人集団が挙げられる。カーロイや旧全国市民急進党のヤーシ・オスカル、社会民主党右派のガラミ・エルネー *Garami Ernő* のように評議会政権に参加しなかった者、社会民主党中央派のクンフィ・ジグモンド *Kunfi Zsigmond* やベーム・ヴィルモシュ *Böhm Vilmos* のように評議会共和国政権に参加した者、あるいはロヴァーシ・マールトン *Lovász Márton* などハンガリー・ナショナリズム的な性格を持つ旧カーロイ党の政治家も含まれ、非共産党員という点以外では政治的に非常に多様であった。

こうした「十月革命」政権に参加した政治家のうち、ヤーシなど旧全国市民急進党の党员、クンフィやベームら社会民主党中央派、そしてカーロイならびに一部の旧カーロイ党の党员が、主に「亡命者」として1920年代初頭にカーロイと共に活動を展開した。こうした「十月革命」派の政治家たちと共に、文筆家や新聞編集者なども活動した。彼らは20世紀初頭のハンガリーでヤーシが主導した進歩派雑誌『二〇世紀』やフリーメイソン系の急進的な新聞『世界 *Világ*』、社会民主党機関紙『人民の声 *Népszava*』など左派系の論説雑誌・新聞で活動していた。彼らのような文筆家や新聞編集者がウィーンで刊行したハンガリー語論説紙を利用して、「十月革命」派の政治家は自らの主張を表明した。本稿で引用の場合を除いて「亡命者」と括弧付けで表記する際は、上記の政治家、文筆家、新聞編集者を指す。彼らの亡命政治活動の主な拠点はウィーンであった。但しカーロイ自身がウィー

ンを拠点にすることはなく、ヤーシら数名の政治家たちがウィーンでの活動を取りまとめ、適宜カーロイに手紙や訪問によって報告したり指示を仰いだりする形が採られた。

「亡命者」は当初、パリ講和会議が中央・東ヨーロッパに規定しようとした国際政治体制への対案の提示を試みた。本論文では、この国際体制を「パリ講和会議体制」と呼ぶ。

「亡命者」は資本主義批判と併せてパリ講和会議体制を批判したが、近代市民社会そのものは否定しておらず、この点で近代市民社会の機能を制限する権威主義や、近代市民社会のシステム本体の変革を求める共産主義やファシズムと異なった。彼らの立場を本論文では「民主主義的な講和条約修正主義」と呼ぶ。

本論文の議論は大きく三つに分けられる。まず、第1章と第2章では「亡命者」の活動の前提として、第一次世界大戦期から1920年代にかけてのハンガリーにおける政治状況を概観する。第1章では1918-19年革命期の政治を概観し、土地改革を通じて社会矛盾が解決された共和制国家を建設しようとしたカーロイ政権が、国内の民族的少数派による隣接新興国家への併合宣言と協商国の後ろ盾を得た隣接新興国家からの介入により歴史的領土の解体に直面し、国内の左右両派からの攻撃も受けて最終的に社会民主党への政権委譲と評議会革命が起こる過程を整理する。その上で、クン・ベーラ率いる評議会共和国政権の動向も確認する。第2章では1919年8月の評議会共和国政権が崩壊した後、1920年代半ばまでのハンガリーで、ホルティ・ミクローシュを摂政とする権威主義的な政治体制が確立していく政治状況をまとめる。

次に第3章から第5章では、1919年秋から1921年夏までの「亡命者」が「十月革命」の再現を目指して統一した組織活動を試みていたことを扱う。第3章では1919年秋から1920年末までの「亡命者」に注目する。この時期にはカーロイとヤーシを中心にクンフィラ社会民主党中央派とも提携した亡命者組織の結成が目指されていた。「亡命者」は農民・労働者と同盟した政権の建設を求め、その政権の雛型としてユーゴスラヴィア軍占領下のペーチでの社会主義者の活動に期待を寄せた。第4章では1920年から1921年夏頃までの「亡命者」の活動を、彼らの結節点であった『ウィーン・ハンガリー新聞』に注目して論じる。1920年2月以降、同紙の編集体制は共産主義者が中心であった。しかし1920年12月にチェコスロヴァキアで同紙が流通禁止処分を受けたのを契機に編集体制が刷新される。1921年6月からはヤーシが編集・運営を担うようになり、『ウィーン・ハンガリー新聞』から共産主義者は排除される。第5章では、「亡命者」と1920年9月以降のペーチ市長リンデル・ベーラとの関係を扱う。第一次世界大戦の講和条約であるトリアノン条約は1920年6月の調印後、1921年夏に批准書が関係各国で交わされ、履行されることとなった。ペーチとその周辺地域はハンガリーに返還され、政権奪還後の政府の受け皿としてペーチ政府を認識していた「亡命者」は活動方針の転換を迫られた。

以後の彼らは、パリ講和会議体制を前提とした形で活動を続けることとなる。第6章から第8章では、1921年夏から1920年代半ばにかけての「亡命者」の反ホルティ活動の高まりとその分解過程を扱う。第6章では「亡命者」による対外宣伝活動の具体例として、1922年8月にウィーンで開かれた列国議会同盟第20回本会議の会場で「亡命者」がハンガリー国内の政治体制を批判するパンフレットの配布を試みた事件を取り上げる。彼らは列強に対して自らの政治的主張を発信する際、ホルティ体制の非民主主義性・暴力性を告

発する形式を採り、それを同時に「十月革命」の独自性の主張へと繋げていた。後述する
ように、当時のハンガリー政府による戦後体制への批判と「亡命者」の主張を対比させると、
両者が自らの主張を列強に訴える際に、民族的少数派の保護と軍備縮小といういずれも
第一次世界大戦後のヨーロッパで重要とされた政治課題を利用していただことが明らかと
なる。第7章では「亡命者」が列強に対して行った対外宣伝活動の二つ目の具体例として、
カーロイが第一次世界大戦期に協商国の諜報活動を行った疑惑を理由にハンガリー国会で
非難されて国家反逆者として裁判所に訴追された事件を取り上げる。ここでも、「亡命者」
がパリ講和会議主導で形成されようとしていた中央・東ヨーロッパの国際体制を引き続き
批判していた一方で、その政治枠組みを利用していただことが明らかとなる。更に、1923年
から1924年にかけてカーロイが拠点をロンドンに移して自発的な政治活動を行うように
なったことで、「亡命者」の間で活動の方向性の違いが次第に浮かび上がることとなった。
第8章では1924年11月にパリで結成されたハンガリー人権連盟の活動に注目する。カー
ロイは「亡命者」との関係も保ちながら、亡命共産主義者にも接近する。この時点で既に
「亡命者」の間での路線対立は明確になっており、「十月革命」の再現を目指す「亡命者」
の統一行動は挫折することとなった。

これらの議論を踏まえて、終章では「亡命者」の活動の特徴を再考する。第一次世界大
戦後の中央ヨーロッパの政治枠組みを考える上で、労働者や農民との同盟を目指して講和
条約の対案を模索した彼らの政治的立場は、ファシズムや共産主義とは異なる講和条約修
正主義の一例として位置づけられる。パリ講和会議体制の対案の提示を試みた「亡命者」
が国際的な承認を得られない中、彼らは列強に自身の主張を発信するために戦後体制の枠
組みを利用するようになった。しかし、反ホルティ派のハンガリー系亡命者が幅広く結集
することはできなかった。「亡命者」は「十月革命」への参加経験を共通項としていたため、
ハンガリー政府との差異化を図って領土修正の主張を回避し、また共産主義とも一定の距
離を取ろうとした。その上で旧協商国が主導して形成されたパリ講和会議体制の対案を最
終的には模索した。このため、彼らの政治的正統性を認めうる有力な後ろ盾を得ることが
容易ではなく、それが結果的に彼らの活動方針の選択肢を狭めたと考えられる。